第４回「One Company, One Athlete」 2013年 12月5日開催

トップ・アスリートのための支援・雇用に向けた企業説明会

2020年東京オリンピック・パラリンピック開催が正式に決定し、日本中でスポーツへの関心が高まっている。その一方で、練習環境や遠征費の問題、就職の場の確保に不安を感じているトップ・アスリートも少なくない。こうした中、日本オリンピック委員会（JOC）と経済同友会で進めてきた、アスリートの就職支援ナビゲーション「アスナビ」の重要性が一層高まっている。第4回となる説明会では、夏季・冬季のオリンピック・パラリンピックを目指すトップ・アスリート8名が紹介された。

世界の頂点を目指すトップ・アスリートが集結

トップ・アスリートの就職支援ナビゲーション「アスナビ」は、これまで20社26名の就職を実現してきた（2013年10月22日現在）。経済同友会における会員企業向けの説明会は、今回で4回目となった。

前原金一副代表幹事・専務理事は「2020年東京オリンピック・パラリンピック開催が決定し、スポーツに対する関心が大変高まっている。しかし、練習費・遠征費の捻出に苦労を重ねる選手は依然として多い。選手をサポートするアスナビの役割は、ますます重要になってきている。この会をきっかけに全国で応援する企業が増え、一人でも多くの選手の練習環境が向上し、着実にレベルアップが実現していくことを期待したい」と挨拶した。

続いて、青木剛JOC副会長兼専務理事が登壇した。

「日本のトップ・アスリートが世界を舞台に真剣に闘う姿は、若い人を中心に、夢と希望を与える。まさに日本の宝というべきトップ・アスリートを育て支えていくために、ぜひアスナビにご協力を賜りたい。開催が決まった2020年の東京では、有形、無形のレガシー（遺産）をスポーツ界に残すはずだが、アスナビがますます発展し、同様の支援制度が各国で行われるようになれば、これもまた無形のレガシーの一つになる」と述べた。

会では、北島康介選手をはじめ多数の競泳メダリストを育て上げた平井伯昌氏が、「世界で勝ち抜く人材を育てる」をテーマに講話を行った（次頁参照）。また、アスナビを通じ2選手を採用した松﨑毅キッコーマン執行役員人事部長による発表や、横尾隆義ポピンズ取締役、久慈竜也久慈設計社長による採用報告も行われた。

最後に、夏季・冬季のオリンピック・パラリンピックを目指すトップ・アスリート８名による現状説明（詳細はP15～16）、懇親会が行われた。

前原金一 副代表幹事・専務理事

青木剛 JOC副会長兼専務理事

基調講話

世界で勝ち抜く人材を育てる

平井 伯昌 氏

東洋大学法学部 准教授・水泳部監督
日本水泳連盟 オリンピックヘッドコーチ

精神性を重んじる日本の指導法は世界の大舞台に通用する

12年のロンドンオリンピックでは、直接指導した4人の選手全員がメダルを獲得し、大変うれしい思いをしました。これまでの経験を基に、どのような形で人材育成に携わってきたかをお話しします。

私は、日本独自の指導法について、大変優れていると考えています。それは武道の伝統に根差した、「心技体」を一体化して鍛える発想です。日常的に身体を鍛えつつ精神も鍛えなければ、オリンピックや世界選手権等の大舞台で精神力を発揮できないのです。

精神的な面では、まずは忍耐力と克己心を強化すること、苦しい経験を乗り越えさせ自信をつけさせることを基本にしています。そして、自ら何をするべきかを考えられる選手に育てることが、指導の最終的な目標となります。

その実現のために、私は四つのことを軸にして指導を行っています。

まず、「世界をリードする気概を持つ」ということ。選手には金メダル獲得と世界記録更新の両方を狙わせます。一昔前とは違い、日本人が世界記録を狙うことが不可能ではない時代となりました。そのためには、従来の常識を打ち破る挑戦も不可欠です。

同時に、世界の選手が日本に水泳を習いに来るようでなければ、世界をリードしたとはいえません。さらには水泳を通じた人間形成という面でも、世界に出して恥ずかしくない人間を育てる義務があります。

ないがしろにはできないティーチングの重要性

二つ目に、「選手を知る」ということです。年中選手のことを考えて、人間性そのものを見抜くこと。これが一番大事なことだと、コーチを始めたころに教わりました。人を把握する手っ取り早い方法はありませんが、距離感の取り方が大事だと思います。近い距離で話すだけでなく、距離を取って仲間内での言動やポジションを見る、友人やスタッフの評判を聞く。こうしたことで、主観だけの判断を防ぐことができます。

三つ目が、「チーム制を強化する」こと。選手、コーチ、スタッフで時間をかけ議論を交わすと、自分とは異なる課題意識を感じたり、強化の方向性を共有したりするようになります。なおかつ、水泳ばかりしてきた選手にとっては大人と接する貴重な機会にもなります。

最後は、「ティーチング」の重視です。指示・助言を与えるティーチングではなく、相手から答えを引き出すコーチングこそ重要ではないかと思われる方もいるでしょう。しかし、誰もが最初から「自ら考える」ことができるわけではありません。中村礼子選手（オリンピック女子200m背泳ぎで2度銅メダル獲得）も、最初は「大会前に不安になるから指示が欲しい」という理由で私の所に来ました。自信や経験のない相手にまずは積極的なティーチング（「～しなさい」）をする。半依存の相手に消極的なティーチング（「～してはどうか」）をする。半自立の相手にコーチング（「どうしたいのか？」）をする。自立した相手を見守る。このような段階を踏んだ指導で、環境や人のせいにしない自省できる人間に育てる必要があります。

以上のような形で選手への指導を行ってきましたが、私が次に目指しているのは、スポーツを通じて社会のリーダーを育てるということです。引退しても社会貢献できる人材を輩出していきたい。今後もアスナビを通じた支援をよろしくお願いします。

トップ・アスリートと企業がWin-Winの関係に

荒木田裕子JOC理事は「アスナビ」の概要を説明し、以下のように語った。「われわれの目的は、単にアスリートの雇用だけではなく、企業とアスリートがWin-Winの関係を結ぶことにある。引退後も、社会に出て役に立つ人材を育てていきたいと考えており、また、今日集まったアスリートもその条件を満たす者ばかりであると、自信を持ってお勧めする。ぜひ、ご協力のほどをよろしくお願いしたい」。

採用企業の活動とメリット

- グローバル企業にとっては、日本国内のみならず、グローバル拠点を含めた社員の一体感の醸成に役立つ。
- 競技を通じた諦めない心、世界へ挑戦し続ける姿勢が社風づくりに影響する。
- 所属企業としてメディアへの露出により高い広告効果を生む。

採用企業紹介

キッコーマンではアスナビを通じ、競泳の上田春佳、カヌーの竹下百合子両選手を採用。上田選手については「将来も社員として働きたい、特に食育に携わりたいとの意向が採用の決め手となった」と同社の松﨑毅執行役員人事部長は話す。両名は嘱託社員として採用されたが、引退後、コーチになるか正社員として働き続けるかは自身の判断に委ねるとしている。

両者ともコーポレートコミュニケーション部の配属となり、広報関連業務を担当。出社日は固定せず、オフシーズンを中心に通常業務、全国を巡り交友を深める活動に従事した。広報業務では主にＨＰ等への情報掲載を行っている。

採用に当たっては処遇や、会社との連携体制、従業員による応援体制等が課題となったが、一つひとつプロジェクトを組み、検討を重ねた。その結果、上田選手のロンドンでのメダル獲得もあり、「社員の一体感醸成には計り知れない効果があった」と松﨑氏は振り返る。

このセッションでは上田選手も登壇。今季限りでの現役引退を発表した上で、「12年の日本選手権、そしてロンドンでは社員の皆さんに大きなパワーを頂いた。これからはキッコーマン社員として、一社会人としてしっかり鍛えてもらい、活躍していきたい」と今後への抱負を語った。松﨑氏は「アスリート採用では競技と仕事のバランスはもちろん、引退後の処遇、昇給・昇格といった現実的な課題もある。この機会を活かし受け入れ態勢を整え、最大限のバックアップができるよう努力したい」と語った。

松﨑 毅 氏
キッコーマン
執行役員人事部長

上田 春佳 氏
ロンドンオリンピック
銅メダリスト

トップ・アスリートによるプレゼンテーション

（2013年12月5日現在）

丸茂 圭衣

水泳・シンクロナイズドスイミング
21歳。関西外国語大学2014年卒業見込み。

最大の目標は2016年リオデジャネイロオリンピックに出場し、メダルを獲ることです。しかし、大学卒業後は経済的に厳しい状況にあります。支援を受けながら競技を続けられ、引退後も働ける場所があることはどんなに心強いことかと思い、今回応募させていただきました。

現在はナショナルチームの候補選手として、2014年2月の最終選考会での代表入りを目指しています。採用いただいた際には、日本代表として活躍することで企業のイメージアップに貢献し、また、これまで競技で培ってきた表現力、忍耐力、協調性を発揮してどんな仕事にもチャレンジしたいと思っています。

岸 彩乃

トランポリン
21歳。金沢学院大学2015年卒業見込み。ロンドンオリンピック日本代表。

両親が体操競技をしており、５歳からトランポリンを始め、夢中になりました。2012年は念願のロンドンオリンピックに出場し、今までにない感動を味わいましたが、同時に世界との壁も感じました。この経験を活かし、リオでは世界の選手と対等に戦いたいと思っています。

そのために、競技に専念できる企業を探していますが、どう就職活動をしていいのか分からず悩んでいました。本日はこうした場をいただき、本当にありがたく思います。リオ、そして東京を目指し、努力する姿を社員の皆さまにも見ていただくことで、オリンピックやトランポリンを身近に感じていただければと思います。

第３回「One Company, One Athlete」

松下 桃太郎

カヌー
25歳。日本ウェルネススポーツ専門学校卒業。ロンドンオリンピック日本代表。

名前のことをよく聞かれます。父が『日本一を目指すように』と願い、名付けましたが、今の目標は世界一です。2010年のアジア大会では日本人としては初めて、カヌースプリント競技で二つの金メダルを獲得し、12年ロンドンオリンピックにも出場しました。しかし、ロンドンでは非常に悔しい結果に終わったので、リオではメダルを、そして東京では金メダルを目指したいと思っています。

契約満了で石川県体育協会を退職し、現在はフリーで競技を行っています。カヌーは海外遠征が多いのですが、採用していただき出社する際には、何でもやる覚悟です。

高橋 侑子

トライアスロン
22歳。法政大学2015年卒業見込み。

高校１年からジュニア日本代表として経験を積むうちに、本気で世界を目指したいという気持ちが芽生えました。オーストラリアへの短期留学では、競技と語学の両方をレベルアップさせる４カ月を体験でき、視野も広がりました。

現在は特定のチームに所属せず競技を行っていますが、その分、自己マネジメント力は高まっていると実感しています。今年からはナショナルチームの一員として世界を転戦しています。

最大の目標は、東京での金メダル獲得です。環境が整い、競技に集中できれば、今までの経験を活かしながら最大限に自分の力を発揮することができると確信しています。

山田 勇磨

テコンドー
22歳。大東文化大学2014年卒業見込み。

全日本選手権を３連覇してからは、国内で最もレベルの高い選手と自負しています。

絶対にリオデジャネイロオリンピックに出場し、メダルを獲得したいと考えています。日本のテコンドー界では、男子のオリンピック入賞者は誰もいません。リオでは自らメダルを獲得し、新たな歴史の１ページを刻みたい。企業の皆さまには、歴史への挑戦に機会を与えていただければと考えています。

私の強みは「不撓（とう）不屈」の精神です。諦めず、粘り強く競技を続けた結果、大学入学後に急激に成績が伸びました。この力で、社会全体に夢や希望を与えていきたいです。

上山 友裕

パラリンピック・アーチェリー
26歳。同志社大学卒業。

パラリンピック・アーチェリーは、さまざまな障がいがある人が一般のアーチェリーとまったく同じルールで行う競技です。単にシューティングスタイルが異なるだけで、私たちが一般の大会に参加することも可能です。

脚に重度のまひがあり、今後どうなるかは自分にも分かりません。正直、怖さも感じます。しかしこの身体だからこそ、世界で活躍する機会に巡り合えました。競技を通じ、できるだけ多くの人に影響を与えていければと考えています。

現在は一般企業で通常勤務をしていますが、今の練習量ではメダルの可能性は５％程度です。競技に集中できる時間と環境を求めています。

ビデオプレゼン

岩本 憧子

スキー・モーグル
20歳。中京大学2015年卒業見込み。

現在はオリンピック出場がかかるW杯出場のため、海外遠征に出ています。競技を通じて見せる力、勝負強さ、忍耐力を学びました。この３点を最大限に発揮して、会社を盛り上げ、お役に立ちたいと考えています。

堀　珠花

アイスホッケー
21歳。北翔大学2014年卒業見込み。ソチオリンピック日本代表。

女子日本代表「スマイルジャパン」のソチ出場が決まりました。皆さまの期待に応えられるよう、タフな試合運びで勝ちにいきたいと思います。採用していただければ、皆さまを元気づけられるようなプレーをしていきたいです。

※開催後に採用決定

●トップ・アスリート支援についてのお問い合わせ先

JOCキャリアアカデミー ■e-mail　career@joc.or.jp　■TEL　03-5963-0355

※電話受付時間は月曜の午前10時から午後6時まで